京城新報

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し急ぐべからず

捕題　みどり

▲トロール漁業の有効なるはいふ迄もなけれど、這は一時的にして永遠に履行すべきことの有害なるを以て日本にては過般ある一部の區域を除くの外斷然禁止いたし候、韓國にても該漁業の許否に就ては當局者間に種々の意見有之ならんと存候が兎も角も農商工部に於ては今般東海岸方面に五件丈許可せる由に候、而して之が將來は如何なる結果を來すやは知らずと雖も要するに小漁業家の集合せる韓國にあつては此の大仕掛けにして永續的ならざる方法は如何ならんと懸念候、則はサア蒸汽の力を以てヤツ漁者を驚かし海中に大革命を起さしむる職業に候へば此れにて驚りたる魚類は又と再び斯る險呑なる場所には來らず候、而も果してさなりとすれば余輩は此トロール漁業を陸上に用ゐ燕漁の力を以て大に韓國の現代を一掃し之が狀態を變革されたしと存候然らざるに於ては此の方法は余り歓迎いたさず候

▲曾禰副統監を知れる或る消息通の談なりといふを聞くに、子の事に臨むや、熟考時代と實行時代との別有之由而して熟考時代にありては誰が何といはうと容易に手を下さゞる代りイザ實行時代期さなるや勇邁敢爲毫も四邊を顧慮せず、敢然として初一念を貫徹せざれば巳まざるの慨あるとかのことに候が、道は洵に結構な性分にて行末何さなく賴母しく候、併し余輩の見を以てすれば子は所謂其の積り丈にて少しも實行の期に入らず從つて勇邁敢爲はおろか寸進尺躙(斯る熟語を許さば)さへもいたさゞるやうに候、唯六十年の閲歷中少しく眼を鑿たしめたるは初期議會の時に内閣書記官長として能く議會を支配し、議員を操縦したることに候、尤も這は一時狂花を咲かせし迄にして昨今と雖も所謂熟考時代に屬せるものなるべく故を以て末頼母しき或有之候も併し今の時は子に取つて大に勇邁敢爲をなすべき際かと存じ候、余輩は子に向つて誰が何といつてもイツかな肯かぬといふ性分を躍如されんことを鶴首翹望して待ち居り候

▲近來韓國觀光團が内地の各所に於て組織され續々として渡韓さるゝやの噂に候、併し觀光といへば其の國の風光を見物するものと承知いたし居り候が朝鮮は風光を賞せんが爲めに態々金錢を遣つて來る程の價値有之候哉、山は禿げ流は少なき朝鮮の風光は誰か眼にも無趣味の國と外思はれず候寧ろ朝鮮視察團とでも銘打つが世間の人氣上よろしかるべしと存候何れにしても余輩は斯の種の團体を催ふすものが眞の觀光視察を旨とし苟も興業的に流れざらんことを是れ祈り候(二十九日午後三時誌)

文苑

●百人一首讃替(四)　ましこ女史投

●伊勢●
つかのまも忘れぬものをくれ竹の
●元良親王● 逢ふてこの身はいかになるらむ
うき思ひたらよしもなくあらはれて
●素性法師● みはいけにへとわれは慕はむ
まちはひて天をあほげば有明の
●文屋康秀● 月のみ見へてたれかたどつる
風吹きて秋のやまべのあはれさは
●大江千里● 阿蘇山おろし乙女なかさむ
あきの夜の月見ることに隨人が
●菅家● 十歳のいくさたれにむくいむ
急がずは誓ひしものもあるべきを
ひと枝まいらせむ君へ五葉を

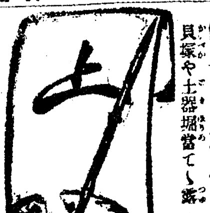
●椋助君足下　鹿の子

椋助君足下、余は貴紙の愛讀者にして足下の新町見物記を多大の趣味を以て歓迎したる一人也、然り余は重ねて云ふ、足下の新町見物記を愛讀し歓迎したる點に於て敢て人後に落つるものに非ず、然るに花柳子なる人あり、一々例證を擧げて足下の獻策に反駁を加へたり、然れども考證多く杜撰一笑にだも値せず、妓一人を養ふに一ヶ月七十金を要すと云へるが如き即ち其の一なり、足下、足下は之に對して一矢を酬はず、余は足下の健在を疑はざるを得ず、

俳句

●自選五句　恕堂

柳垂れて白牛の群や露涼し
玉川に魚釣る朝や露涼し
草踏みて碑銘を讀めば露涼し
籠を置いて草刈る鎌や露涼し
貝塚や土器堀當てゝ露涼し



佐倉宗吾

(九十四)　眞龍齋貞水講演

名主新五郎は自家の者に云附け、スッカリ眠た振をして居ると、頓て表の門を、トン〳〵 役「新五郎ッ 滑川村名主新五郎ウ」トン〳〵頻りに叩く、新五郎はさんざつぱら叩かせて 新「アツ、ア、アー、オウコラ助十居るか……助十ウ、コラ皆な起きろ」、ガタ〳〵名主の新五郎、寝衣のまゝで、門口を開けて 新「ハア、誰樣でごんす、誰樣でごんすかね 役「其りや滑川村々役新五郎は居るか 新「ハア、私は新五郎でごんす誰樣でございます、夜更に何でございます 役「コレ、堀田家の見廻り役人だ 新「ハア、堀田樣役人でございますか……皆な起きろ……コラツ、皆な起ろつてば、早く燈火を點けろ、御役人樣が御出になつた……平助は居ねえのか、皆な起きてくんろ、戸迷ひをしちやいけねえよ……御役人樣が御出張になつたから、起きねえかよ……コラ、蠟燭の尻の方へ火を點けたつていけねえだよ、寝惚けるなつて事よ、皆な起ろやい、床の中へ入つた計りで、寝惚けるもありやしない 新「早く起きねえかよ、早う起きろ」○「ハア、唯今起きます、御待ち下せえ」ガタンピシンと來まして○「アー、ウー」なんて唸つて居る者がある 新「イヤ斯りや御役人樣、何でございます 役「コレ新五郎、其方村の者であらう、吾々が唯今、觀音堂前に於て、宗五郎はじめ怪しき者を認めたるに依つて、縛捕らうとすると、鋤、鍬、馬鍬を以て、悉く手向ひ致したるは皆な當村の百姓に相違ない、不埒な奴をするではないか、斯の通り一同怪我を致した、何うも恐しい奴等だ 新「ハア斯りや御役人樣の前でございますが、近頃どうもハア其意を得ねえ事でございます、當村の百姓が上役人に御手向をしますと云ふ理由がねえでがすから、其りや何かの間違でございませう 役「滑川村で百姓が手向をしたから滑川村の百姓に相違ない 新「滑川村で百姓が手向のしたから、滑川村の百姓に相違ないと言はつしやるが、當村の百姓は、お前さん方に御手向を致しますなんて、途方もねえ事を云ふもんぢやございませぬ又當村の百姓であると云ふやうな、何か證據の品でもございまして、御尋ねになる事でございますか、名主新五郎、近頃甚だ迷惑の次第でございますが、何か證據があつて、當村の百姓と云はつしやるでございますか 役「それは證據も何にもないけれども當村の藪から馬鍬や何かが出たのであるから 新「其りや當村の藪から馬鍬が出たから、當村の百姓が突き出した譯でございませぬ、コレハア證據のねぇ事を搆へて、夜中に名主の役宅叩起されちや、困つたものでございませぬ、何う云ふ理由でございますか、當村の百姓は僅かしかございませぬから喚集めれば判る事でございます、如何な者が御手向をしたか、御調べを願ひてねもんで、當村の百姓、手向をしねえのに、手向をしたなんて云はつしやつては、役人は退役しなくつちや成らねえ、私これから佐倉御城中へ御願を致します、貴下方は盗人だとか泥棒だとか、皆な縛捕る御役柄で居らつしやりながら、其役柄が罪人を掴まへねえでむやみに土地の百姓〳〵とがなられた日にや、土地の者はとんでもねえ迷惑の事でございます、一体どんな顔の奴でございましたか 役「何う致しても夜の事ではあるし、さう一々分も附かなかつたが、事の始末はさう云ふ事情で、別に證據と云ふ程の事はないのだ 新「證據のねぇ事は、御上樣でも御採上がねぇ筈でございます、新五郎年齡は若いけれども、利口者だから梃でも動かぬ、先方の弱味へ附込んで、先方を馬鹿にするやうな、嘲弄するやうな風で掛合ひ込んで居る、

